

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

○留学生との交流から学ぶ(第2学年)

1. 実施期間：2016年10月20日・27日(事前学習・準備)、11月10日
2. 実施形態：総合的な学習の時間、LHR
3. 目的・目標
 - ①留学生との出会い・交流を通して、文化の異なる人々と直に触れ合うことの喜びを体験し、また異文化への共感的理解を深める。
 - ②世界の事情を学び、国際社会に生きる自己を自覚する。
 - ③留学生との学びあいを通して、自己と他者のつながりや、社会の中での自分の価値とあり方について考える。
 - ④交流の企画、準備等を通して、能動的、積極的な態度を身につける。また、本学習を通して、将来の目標を前向きに考えるよう働きかける。
4. 他機関等との連携
大阪学院大学・成蹊大学・大阪経済大学・大阪府立大学・追手門大学
5. 概要

(1) 対象：第2学年(7クラス・約260名)

(2) 学習過程と内容

①事前準備：

事前学習で、当日のプログラムの確認・準備を行った。まず、1クラスを一班6名程度の5～6グループに分け、自己紹介の時に渡す名刺と当日使用するカルタを作成した。その後、留学生に聞きたい質問をグループで考えてまとめた。

②留学生との交流：

1時間目は、名刺交換をしながら自己紹介をした後、カルタ取りのゲームで交流を深めた。最初に、事前に用意していたカルタの絵に合わせて、読み札と生徒のメモ用紙に留学生の母国語を入れてもらい、覚える時間を取った後にカルタ取りゲームを行った。

1時間の中で、自然に打ち解けることができた。

2時間目は座談会形式で、生徒と留学生の方がお互いの文化や日常生活について話し合った。生徒からは事前に準備していた質問以外の質問も次々と飛び出し、逆に留学生の方からも質問があった。民族衣装を試着したり、お土産のお菓子をいただいたり、また、写真等で各国の文化を紹介してもらうなど、和やかな雰囲気の中で交流が行われた。

(3) 成果及び評価

日頃、海外の人と交流する機会の少ない生徒たちがどういう反応を示すか心配していたが、予想以上に交流活動を楽しんでいた。交流が始まると、準備した以外にもいろいろと積極的に質問をし、会話がはずんでいた。これは、参加していただいた留学生の方々が大変友好的に温かく本校の生徒たちに接して下さったところが大きい。また、年齢の比較的近い留学生の方々と日本語で会話ができることが生徒たちにとっては新鮮で、緊張感なく交流できたようだ。生徒の感想について、代表的なものを以下に挙げる。

- ・いろいろな国の事を知れて良かった。その国に行ってみたいなーって思った。
- ・外国の方との交流は普段ほとんど経験することができない。これからも継続して行っていくべき。
- ・これから進路を考えるためにも、とてもためになった。
- ・言葉が違うだけで伝えられないことのもどかしさを感じた。

○ESD活動について(第2学年)

1. 実施期間：2017年1月19日、2月2日、2月6日
2. 実施形態：総合的な学習の時間、LHR
3. 目的・目標
 - ・修学旅行で訪れる沖縄本島北部における第二次世界大戦末期の地上戦と、その最前線に駆り出された少年兵の体験について、DVDとプリントを通して学習する。

- ・北淀高校がユネスコスクールであること、ESD(持続可能な開発のための教育)とはどういう活動なのかを理解させた上で、平和について考える機会とする。

4. 概要

- (1) 対象：第2学年(7クラス・約260名)
- (2) 学習過程と内容

①1月19日

[NHKのドキュメンタリー番組『あの日、僕らは戦場で-少年兵の告白-』を視聴し、プリントで見たことをまとめる学習①](以下、内容の概略)

70年前の1945年、沖縄北部の恩納岳で戦った少年たちは、日本軍で唯一の少年ゲリラ部隊であった。部隊の名前は”護郷隊”。およそ1000人の10代半ばの少年たちがアメリカ軍と戦った。過酷な訓練によって兵士に変えられた少年たちは、次第に人間らしい心を奪われていく。なぜ日本は、未来を担う子どもを戦場へ送り込んだのか。兵力が不足する中、兵士にできる年齢を引き下げ、日本各地で子どもを戦争に利用しようとしていたことが明らかになってきた。子どもを戦場へと駆り立てていった戦争の狂気。少年たちは体力的な訓練のみならず、死を怖がらないよう徹底して教え込まれた。死の恐怖を突きつけられたことで、異常な精神状態に追い込まれた人もいる。

“護郷隊”が作られた当時、日本は、乗組員が命を捨てて突撃する特攻を行うまでに追い詰められていた。そんな中、日本軍が目にしたのがゲリラ戦だった。ゲリラ戦とは、兵力差がある敵に正面から挑むのではなく、ジャングルなどに潜伏し、奇襲攻撃などによって相手を消耗させる戦い方である。当時、沖縄には、本土への侵攻を一日でも遅らせることが求められており、“護郷隊”の少年兵たちには、弾薬や物資の運搬などの後方支援ではなく、最前線でアメリカ軍と戦うことが課せられていた。志願とは名ばかりの実態。国は、故郷を護るという大義のもと、少年たちを招集していった。1945年4月1日、アメリカ軍は18万の兵力で沖縄への上陸作戦を開始、うち5万人は北部へ向かった。対する日本軍はおよそ3500人。このうち”護郷隊”の少年兵はおよそ1000人だった。故郷が戦場になることで、少年たちは、アメリカ軍に使わせないようにと、上官から、自分の村や家を焼き払うよう命令されるなどし、別の苦しみにも直面することになる。日本本土のために戦った”護郷隊”。当時少年兵の一人だった照屋さんの言葉：「沖縄は犠牲だとはっきり言いたい。日本としては、本土さえ守れば、沖縄は玉砕しても一部だからいいという考え方がはっきり目に見えている。」照屋さんには、その”護郷隊”の姿が、今の沖縄に重なって見えるという。

②2月2日

前半に振り返りのプリントを記入させた。

修学旅行前に見切ることができなかった[NHKのドキュメンタリー番組『あの日、僕らは戦場で-少年兵の告白-』を視聴し、プリントで内容をまとめる学習②](以下、内容の概略)

恩納岳では、わかっているだけで36人の少年兵が命を落とした。しかし何より彼らを苦しめたのは、仲間の死を目の当たりにしても何も感じない自分の心だった。「友だちが撃たれても、心配するような気持ちに切りかえることや、考える余地もないぐらい一生懸命だった。命令通り。優しさも怖さも何もない。」さらに、けがをして自力では歩けず撤退できない友人の少年兵を、軍医が射殺したことを目撃した少年兵もいた。どうすることもできず「戦争だから仕方がない」と自分に言い聞かせてきたという。しかし、心に受けた傷は消えず、その記憶を長い間、胸のうちにしまい込んできた。

③2月6日

前半に振り返りのプリントを記入させ、その後、「あなたがあの時代の沖縄の少年だとしたら」「沖縄が1972年までアメリカの統治下にあったことについてどう思いますか」「今も沖縄に米軍基地があるのはなぜだと思いますか」「どうすれば平和を保つことができるか」「修学旅行で行く沖縄について今どう思うか」などのテーマに沿って、班毎に話し合いをさせた。

(3) 成果および評価

修学旅行で訪れる沖縄という地で起こったこと、そこに住む人たちが経験してきたことを知識として自分の中に取り込み、その知識を現地で深めることに焦点を置き、この学習に取り組ませた。生徒たちは『あの日、僕らは戦場で -少年兵の告白-』を真剣に視聴し、各授業後の振り返りにも時間をかけて取り組んだ。映像ではあるが、厳しい現実から目を背けずに学習しようとする姿勢が多く見られた。残念ながら、修学旅行の決め事に時間がかかってしまい、ビデオの後半を見切ることができずに修学旅行へ行くこととなってしまったのが反省点である。以下は生徒たちの振り返りプリントからの抜粋である。

- ・私の年よりも小さい子や同い年の子たちが銃などをもち、人を殺すなんて事が当然のように行われていたことがとても嫌です。
- ・戦争は怖いだけじゃない。ずっと記憶の中に残るし、大切な人も失ってしまう。
- ・沖縄で昔に戦争があったことをこれから生まれてくる人たちにも伝えていけたらと思いました。
- ・友達の死に何も思えなくなるのが怖かった。
- ・同じ国であったとは思えない出来事ばかりだった。
- ・修学旅行に行く前に全部見たかったけど、少しでも見れて良かった。少し怖かったけど沖縄で戦った人が、「ありがとう」の一言を言って欲しかった、と語っていた事が心にきました。
- ・戦争は今の自分たちには知ることが難しいだろうが、ビデオでも昔のことを振り返れば今に生かせれそうだと思います。当たり前だろうが、人を大切にするのがどれほど大切かわかった。
- ・沖縄戦のことは知っていたけど、ここまで残酷なこととは知らなかった。すごく心に響いた。

○海外協力隊体験者による講演（第1学年）

1. 実施期間：2017年1月23日（6限 事前学習）、2017年1月26日（5・6限 講演会）
2. 実施形態：総合的な学習の時間
3. 目的・目標
広く世界に興味・関心を持ち、自分たちとは異なった生活や文化があることを知る。

4. 他機関等との連携

JICA関西、公益社団法人青年海外協力協会近畿支部

5. 概要

(1) 対象：第1学年（7クラス・約270名）

(2) 学習過程と内容

①事前学習：ビデオ 「世界はキミにつながっている」・「もっと知ろう 世界のこと」
日本と世界のつながりや国際協力についての学習をした。

②講演会当日

例年は、公演2時間の構成だったが、生徒の集中力も考え、今年も講演会の前に「We Are The World」のDVD（エチオピアの飢饉に関する報告と歌）を15分程度視聴した。

講演会では、講師の方々は民族衣装を身にまったり、パワーポイントなどの視聴覚教材を用いたり、上手に生徒を引きつけながら講演されていた。また生徒参加型となるよう、クイズやグループワーク、その国の生活についてのすごろくを用意していただくなど、様々な工夫をしていただいた。多くの生徒が積極的に参加し、盛り上がったクラスが多かった。

(3) 成果及び評価

本講演は普段あまり社会に関心に向ける習慣のない生徒達が、自分がその一員であることを意識し、より積極的な姿勢を持つ貴重な機会となった。また、講師の方の熱意あふれる話を聞くことで、外国に関心のなかった生徒が世界に目を向ける大きなきっかけとなった。講演前4回にわたり、世界の貧困や識字について学習したことで、生徒の理解はより深まったようだ。

ただし、講演会の事前学習として視聴した国際協力に関するビデオは、変更した方がいいと考える。内容が食料自給率の話や、日本が協力して作った施設の紹介だったが、生徒が大体知っていたり、単調な感じであったりしたため、他のビデオ学習に比べて多くの生徒が寝ていた。青年海外協力隊のドキュメンタリー的な内容があればと思う。以下、生徒の講師の方々へのメッセージから代表的なものを挙げる。

- こんなに遠く離れていても、世界はつながっていると感じた。これからは無駄遣いしないようにします。
- 今日は楽しかったです。すごろくをしたり、クイズをしたりしてマラウイのことがたくさんしれてうれしかったです。もっと、いろんな話を聞いたりしたかったです。
- 日本で高校へ行くのは当たり前だとおもっていたのが、マラウイでは、当たり前ではないことを実感した。
- 実際に言った人の話と言っていない人の話では現実味が違うと思いました。
- ウズベキスタンの話をしていただきありがとうございました。病院の話、市場の話、遊園地の話、自然の話をきいて日本と全く違って色々知ることができてよかったです。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（

）